

シリーズ「遺跡を学ぶ」

158

ならび建つ

国分僧寺・尼寺

上総国分寺

須田 勉

新泉社



ならび建つ 国分僧寺・尼寺 ―上総国分寺―

須田 勉

【目次】

第1章	総国から上総国へ……………	4
1	大國、上総国……………	4
2	古墳時代の「総国」……………	8
第2章	天平の國家構想 国分寺建立……………	14
1	国分寺造営の経緯……………	14
2	「国分寺建立の詔」と「盧舎那仏造立の詔」……………	18
3	国分寺政策を考古学から考える……………	21
第3章	上総国分僧寺の造営……………	23
1	広大な寺院の発掘調査……………	23
2	最初の造営 上総国分寺A期……………	28
3	瓦葺き建物へ 上総国分僧寺B期……………	33
4	B期の造寺所と国師院・講師院……………	42
第4章	上総国分尼寺の全貌……………	66
1	A期上総国分尼寺……………	68
2	B期国分尼寺の寺院地と伽藍地……………	69
3	造寺所の出先機関と瓦窯……………	80
4	国分尼寺の出土瓦……………	83
5	道鏡政権と国分尼寺の造営……………	85
第5章	国分寺研究の最前線……………	87

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 総国から上総国へ

1 大国、上総国

あづま路の道のはて

「あづま路の道のはてよりも、なお奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを」ではじまる『更級日記』。一〇二〇年（寛仁四）九月三日、菅原孝標の娘が一三歳のときに、父の任国である上総国府を門出したときから筆を起こし、一〇五八年（康平元）に夫、橘俊通と死別するまでの約四〇年間にわたる回想録である。

『更級日記』にあるように上総国は、都人にとっては「あづま路の道のはての常陸国よりも、もっと遠い国」であったが、豊かな国力をもつ大国であった。

現在の千葉県は、古代には安房国・上総国・下総国の三国に分立していたが、古くは総国とよばれていた（図1）。七世紀後半の令国制の建設にともない上総国と下総国が成立し、



図1・上総国と古代寺院跡
上総国における郡レベルの古代寺院のほとんどは、国分寺以前に造営されているので、国分寺の建立を支える経済的・技術的基盤は、すでに在地社会に存在していた。

『記』の記述と合わせると、このころまでは古代の国府が存続していたのであろう。

推定国府の西を走る古代東海道(図3)は、天竜川以東の駿河国、相模国の三浦半島を経て東京湾東岸に至る海道で、弥生時代からの交流圏として発展してきた。神奈川県逗子市と葉山町にまたがる古墳時代前期の大型前方後円墳である長柄・桜山一・二号墳は、三浦半島から海を渡り東京湾東岸に至る際に重要な役割を果たした人物を

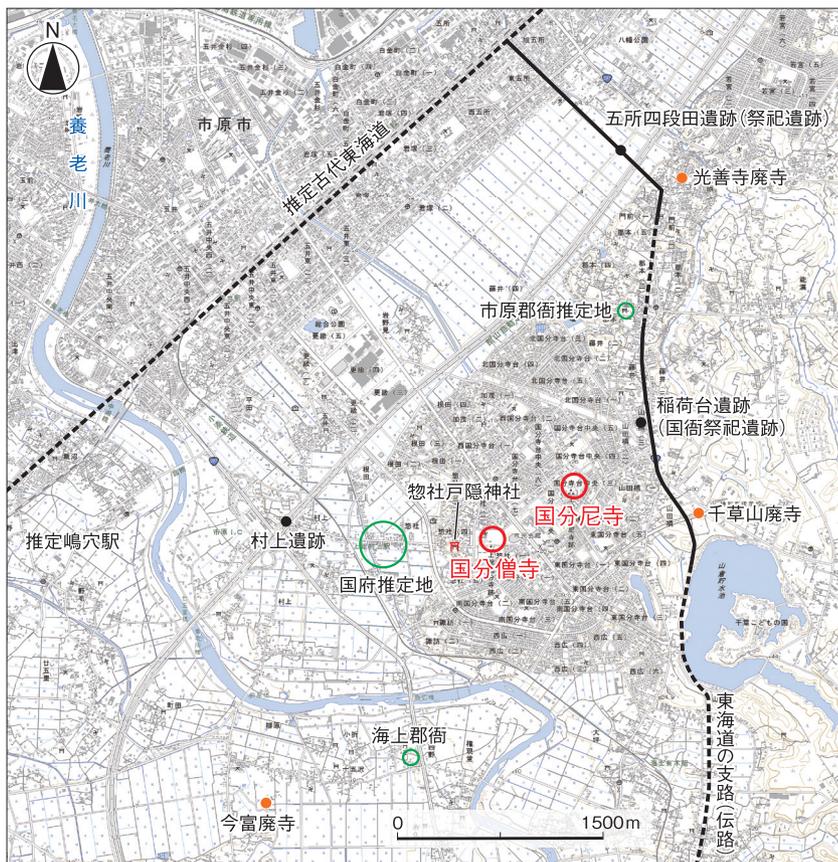


図2・上総国府、国分寺の周辺遺跡
西を古代東海道、南を養老川、東と北を東海道の支路で囲んだ範囲を京城と定め、その中に国府・国分寺・国府を守る大規模な祭祀遺跡である稲荷台遺跡などが記された。

七十八年(養老二)には安房国が上総国から分立し三国が誕生した。さらに上総国は、八二六年(天長三)に常陸国、上野国とともに親王が守に任じられる親王任国となった。親王は太守とよばれ任地へ赴任することはなく、現地の実務は次官の介が担ったのである。

上総国は、はじめ一五郡であったが、平群・安房・朝夷・長狭の四郡を割いて安房国を分立してから、市原・海上・畔蒜・望陀・周准・天羽・夷瀉・埴生・長柄・山辺・武射郡の一郡になった。『倭名類聚抄』は上総国府の位置を市原郡と記す。

上総国府

市原郡は、南を海上郡との郡境にあたる養老川、北を下総国との国界である村田川で囲まれ、東京湾東岸では上総国の最北の郡になる。上総介となった菅原孝標が国司として政務をとった国府は、養老川下流域の上海上国造の支配領域と北の村田川下流域の菊間国造との中間地点(現在、千葉県市原市の惣社・村上地区の養老川下流域の沖積地一帯)を選んで設定されたと推定されている。

西には東京湾を望み、砂州や浜堤上には南北にのびる古代東海道が設置され、東の丘陵上には上総国分僧寺・国分尼寺が建立され、丘陵端部には惣社戸隠神社が鎮座するなど、古代上総国の中枢部が形成されていた。村上遺跡の発掘調査で確認された周囲に溝をもつ大型掘立柱建物を含む七棟の遺構は、国府津(国の港)のような公的施設と考えられている(図2)。一〇二八年(長元元)、平忠常の乱の際に従者が上総国司の館に乱入する事件や、『更級日

が成立する。古墳時代中期になると、小糸川流域に内裏塚古墳（一四八メートル）、小櫃川流域に高柳銚子塚古墳（一四二メートル）、養老川流域には姉崎二子塚古墳（一一四メートル）が成立する。これらは関東地方でも有数の大型前方後円墳であり、大きな古墳群をともなうことを特徴とする（図4）。

また、いずれの大型古墳も各河川の河口付近に築造されるようになり、それぞれの勢力が河川や海洋交通などの水運と深く結びついていたと考えられ、やがて各河川の流域には、南から周准国造、馬来田国造、海上国造、菊間国造が設置された。先に述べたように、古代東海道ルートの原形は、

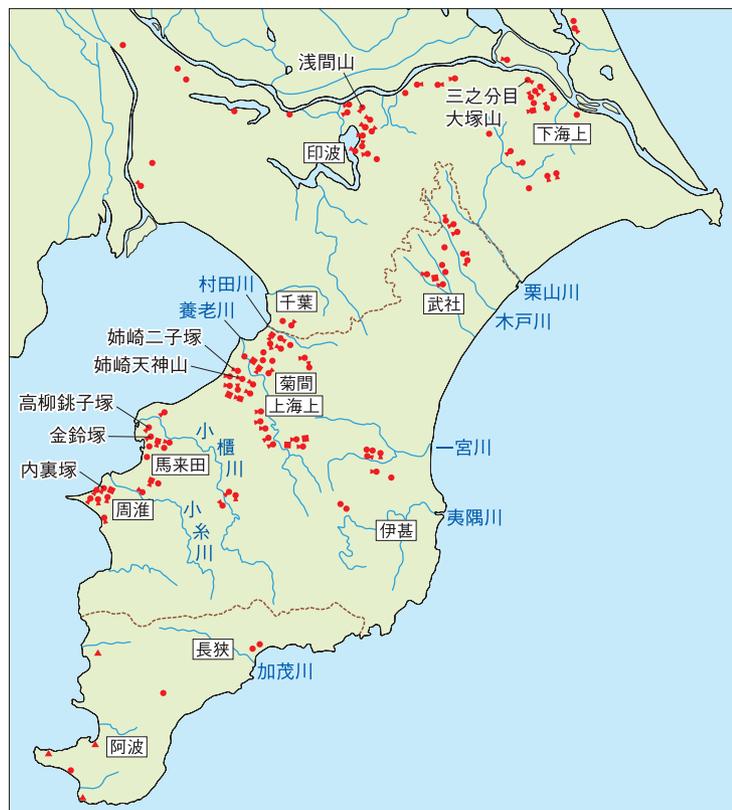


図4・房総半島の国造と主要古墳
 総国では、のちの上総国内には西上総地域に4国造が、東上総地域に4国造の8国造が設置された。また、のちの下総国内には3国造が設置され、上総地域の優位性がわかる。

2 古墳時代の「総国」

総国の分割と古代東海道

東京湾の東岸にあたるいわゆる西上総とよばれる地域には、東京湾に流入する小糸川、小櫃川、養老川、村田川があり、その中流域にはいずれも墳丘長が一〇〇メートル規模の前期古墳

葬った古墳として評価されている。海道は、近畿地方との交流圏として古墳時代を通じて頻繁に利用され、社会・経済、文化の動脈を醸成していった。渡海地点にあたる東京湾東岸の西上総とよばれる地域は、東へと伝わってくるあらゆる文物の上陸地となり、この地域に畿内の性格を形成していったのである。

前述のとおり、国府の位置はいまだはっきりとはしていないが、上総国分寺はその広大な全貌が長期にわたる発掘調査で判明している。この希有な国分寺が成立する以前の古墳時代の上総国の動向について概略を述べておこう。この地域を育んできた歴史が、国分寺を造営する際の組織の編成や寺の構造に色濃く反映したと考えるからである。



図3・古代東海道
 古代東海道は、三浦半島の走水から富津付近に上陸し、下総国の内陸を通り常陸国府にぬけた。

すでに古墳時代には形成されていたと考えられる。その背景にはヤマト王権と東京湾東岸地域の勢力との密接な関係があり、その後の西上総地域の性格を規定したといっても過言ではない。一方、香取市の利根川に平行して形成された浜堤上には、五世紀代の三之分目大塚山古墳（二二四メートル）を盟主とする豊浦古墳群が築造される。のちの下総国に相当する地域には、それまで一〇〇メートルを超える大型前方後円墳は存在しなかったが、この時期に突然出現した背景には、毛野国と同様にヤマト王権の力が強く働いたと考える必要がある。

行政的には総国とよばれた政治的領域が、古くからの勢力（のちの上総国）と新興勢力（のちの下総国）の地域に分割される萌芽が認められるのである。それは単に領域の分割に留まらず、東京湾東岸を北上し、のちの下総国の千葉市の都川付近から内陸を通り常陸国へ至るルート形成と密接に結びついていたと想定される。

ヤマト王権の介入

養老川下流域に継続的に大型首長墓をつくりつづけた古墳群に市原市の姉崎古墳群があり、上海上国造の奥津城と考えられている。古墳時代前期にさかのぼる大型前方後円墳として、釈迦山古墳、姉崎天神山古墳、その隣接地には同じく前期の前方後円墳である今富塚山古墳が築造される。このあたりは四世紀の段階で一〇〇メートルを超える大型前方後円墳が集中する地域であり、総国のなかでもっとも有力な政治集団がこの地に存在したことをものがたる。しかし、大型前方後円墳の造営は、五世紀前半に築造された姉崎二子塚古墳を最後に、六世紀中ご

ろに姉崎山王山古墳（六九メートル）が築造されるまで、約一世紀の空白期間が訪れるという現象が生じる。

一方、養老川下流域における首長墓の縮小化に対応するかのようになり、五世紀に入ると中・上流域にも比較的規模の大きな前方後円墳が出現する。さらに六世紀には、下流域の首長墓に拮抗するように六〇〜七〇メートルクラスの前方後円墳が継起的に築造されるなど、相対的に下流域の勢力の優位性が失われるようになる。

「王賜」銘鉄剣と「倉崎郷長谷部稲」の文字瓦

この養老川下流域における空白期を考える資料として、「王賜」銘鉄剣を出土した稲荷台一号墳がある。この古墳は、上総国分尼寺の北東、谷を隔てた約五〇〇メートルの丘陵上に築かれた直径二八メートルの中小規模な円墳であり、この地区は上海上国造の支配領域である姉崎古墳群と菊間国造の奥津城である菊間古墳群との中間地点にあたる。

中央の埋葬施設からは「王賜」銘をもつ金象嵌銘の鉄剣のほか、先進的な金銅装蝶番金具をともなう横矧板鋌留短甲や胡籬（矢を入れ背負う道具）などが出土し、五世紀中ごろの允恭天皇の時代、ちょうど姉崎古墳群の空白期間にあたる時期に築造されたと考えられる。

鉄剣銘文の意味は次のように考えられている（図5）。

表 王、□□を賜う、敬んで安んぜよ
裏 此の廷刀は、百兵を平伏させる

金象嵌の銘文をもつこの鉄剣は、ヤマトの大王からの下賜品であることに間違いないが、きらびやかな装飾が施された武具などをともなうことから、大きな軍事的武勳に対する褒賞として下賜されたと考えられている。東国の中小古墳の被葬者が、金象嵌銘をもつ鉄剣を下賜される例は、きわめて稀なことである。姉崎古墳群の勢力とは異なる中小の勢力が、おそらく朝鮮半島での戦いに武勳をあげ、その勳功としてヤマト王権から「王賜」銘鉄剣や短甲・胡籙などが直接下賜されたのであろう。東国における中小の勢力の台頭と、それを直接掌握しようとしたヤマト王権により、相対的に姉崎古墳群の勢力が弱められたと考えられる。

同じく、養老川下流域の空白期間を考える資料が、上総国分尼寺から出土した「倉椅郷長谷部稻」□と標記された文字瓦である。この文字瓦で重要な点は、海上郡倉椅郷に長谷部という部姓をもつ人物が居住した事実が判明したことである。長谷部の部姓は雄略天皇の部民と考えられるので、五世紀末から六世紀初頭ころに、ヤマト王権によって姉崎古墳群の首長の政治的支配力が抑えられ、長谷部姓の部民が設置されたと想定される。その系譜に連なる人物が、八世紀後半以降に上総国分尼寺の造営に際し、瓦を寄進したと考えられる。姉崎古墳群における五世紀代のほぼ一世紀にわたる盟主的古墳の空白期間は、允恭天皇と雄略天皇の二代にわたるこの地への直接的な介入による現象として理解される。

在地勢力の衰退

姉崎古墳群のその後は、六世紀中頃に姉崎山王山古墳が造営され、また勢力の中心を少し移動し六世紀後半の原一号墳（九〇メートル）、鶴窪古墳（六〇メートル）などの前方後円墳が築造される。終末期の姉崎古墳群で重要なことは、全国的にもめずらしい前方後方墳の六孫王原古墳（四六メートル）が築かれたことである。七世紀中ごろから後半にかけて築造された前方後方形の周りには長方形の周溝をめぐらせ、後方部には軟質砂岩切石積の横穴式石室を有している。やや小規模になるが同様の前方後方墳は、養老川下流域北岸の諏訪台古墳群と東間部多古墳群を合わせて四基確認され、前方後方墳と方墳の方形を基調とする墳形の構成が姉崎古墳群における終末期古墳の特徴となっている。

このことから姉崎古墳群の勢力は、終末期古墳の時期を迎えてもヤマト王権との関係が修復されないまま律令国家体制を迎えたと考えられる。令制下では、養老川下流域の南岸を海上郡、北岸を市原郡として建郡された。上総国府は、そうした前代の歴史をもつ養老川下流域北岸の沖積平野に設置され、のちに東の丘陵上に接して上総国分僧寺・国分尼寺が建立されたのである。

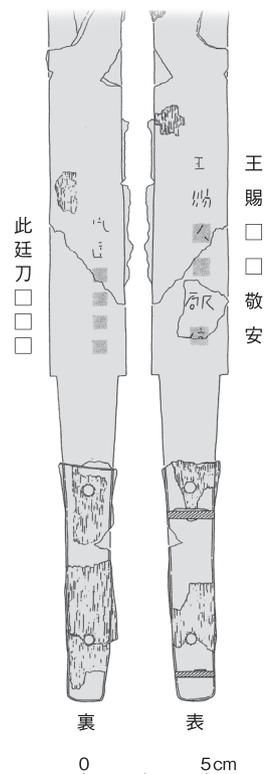


図5・稻荷台1号墳出土「王賜」銘鉄剣（部分）
銘文は、尊い「王賜」の語を文章の上に出す台頭法が用いられている。